Ｎｏ．４８４【２０２１年１２月３日配信】
皇太子来青と合浦公園改修（担当：村上）

こんにちは。歴史資料室の村上です。

歴史資料室の館内展示「県都青森 150 年!!―近代都市への脱皮」では合浦公園のお手植えの松についてご紹介しています。お手植えの松とは、嘉仁皇太子（のちの大正天皇）、津軽承昭伯爵（旧藩主）、裕仁皇太子（のちの昭和天皇）、淳宮（のちの秩父宮）、高松宮（秩父宮の弟）、津軽義孝伯爵によって植えられた松のことです。最初に植えられたのは嘉仁皇太子によるもので、明治 41 年（1908）9 月 26 日に植樹が行われました。

嘉仁皇太子によるお手植えの松

合浦公園では明治 41 年の皇太子来青に合わせて改修工事が行われています。工事を手掛けたのは造園家の長岡安平（ながおかやすへい）でした。長岡はわが国初の公園専門家といわれる人物であり、札幌市の大通公園や秋田市の千秋公園などの設計を手掛けたことで知られています。

長岡は明治 41 年 8 月 15 日に青森市を訪れ、実地踏査を行った上で『東奥日報』の記者に対して合浦公園改修の構想を語っています。長岡は合浦公園が海に面している点を高く評価しており、海を利用して海水浴場や水族館を設けるといった案を示しています。しかし、皇太子来青が 9 月に迫っていたことから、まずは皇太子が使用する休憩所と記念植樹を行う場所の整備が行われました。休憩所は海を眺めることができる園内北方の丘の上に設けられました。

合浦公園　東宮殿下御休憩所ノ景（歴史資料室蔵）

皇太子は9月25日朝、青森市に到着し、翌日午後に合浦公園を訪れました。皇太子は園内に設けられた馬匹（ばひつ）陳列所を見学した後、長岡が設計した休憩所において漁師による網引の催しを観覧しました。漁師が捕らえた魚を水槽に移すと、皇太子は水しぶきがかかるのも気にせず水槽に近づき、談笑しながら魚を眺めたといいます。皇太子は海に面した合浦公園の魅力を感じることができたのではないでしょうか。そして、先に述べたように皇太子はこの時、記念植樹をしているのですが、公園到着後、どの段階で植樹を行ったのかについては不明です。

なお、長岡が提案した合浦公園の改修計画は、明治43年5月の大火の影響により頓挫したということです。

※今回の内容は『新青森市史』通史編第三巻　近代（2014年　青森市）、『東奥日報』明治41年9月27日付などを参考にしています。